



Lisa Fairbrother

### Dodging the blows in the invisible world of intercultural interaction

If you ask students in the English department why they are studying English the overwhelming majority will say that they want to use English either in their future careers or when they go abroad. In either case the underlying assumption is that they are aiming to use English as a means of "real-life" communication. However the tricky thing about communication is that it involves people, and whenever people are involved you can pretty much guarantee that trouble is likely to follow. That's where I come in, because trouble, problems and any other kind of intercultural mayhem are my main area of interest. For the past two and a half years I've been teaching 異文化と英語, a general intercultural communication course, to third and fourth year students. By looking at actual communication situations and the language and body movements used within them, we analyse the different ways that people from different cultural backgrounds communicate and in particular we try to figure out why miscommunication occurs. Most of my own research focuses on problems in intercultural interactions and recently my attention has been drawn towards interpersonal conflict. The paper that I presented at the World Congress of Applied Linguistics (AILA) this past July was a detailed analysis of conflict that occurred in the interaction between a male Japanese college student and a male Chinese exchange student in Japanese. The interaction was interesting because although the Japanese student was becoming more and more annoyed as the conversation progressed, the Chinese student never noticed this. This was because the Japanese student never gave any explicit signals that he was becoming angry. Instead, he displayed a variety of subtle inexplicit signals such as asking questions, rephrasing what the Chinese student had said, explaining extensively, increasing his hand movements, and increasing smiling at certain points in the interaction. These inexplicit signals could be

recognised by other native speakers who watched the video recording of the interaction but they remained invisible to the Chinese student because he had very different expectations of how anger is displayed. In fact the Chinese student had the impression that overall the interaction had been very enjoyable and was not aware that his comments were being perceived in a negative way.

Although outright conflict might be rare, many students in the English department do experience tensions when they interact with people from other cultures, particularly while studying abroad. For most Japanese students this will be the first time that they experience being an ethnic minority and become personally aware of issue of prejudice. For example, one of my students reported being ignored by a female classmate and she attributed this classmate's conduct to racism against Asians. This student's perception may indeed be true and her classmate's conduct may well have been caused by prejudice. However, it has been shown that non-native speakers' use of language, such as being more direct than expected in the target language, may be perceived as "rudeness" and subsequently attributed not to a language problem but a personality problem. Without interviewing the classmate, it is impossible to rule out the possibility that she ignored my student not through prejudice but because she thought she was a "rude" person based on past experiences. Conversely, some Japanese students have criticised non-Japanese for being "aggressive" or "rude" when really the problem was a difference in communication style rather than personality. In short, there is often an invisible gap between the perceptions of participants in intercultural interactions that can lead to serious misunderstandings.

Although greatly rewarding in many respects, intercultural interaction does have the potential to be a minefield of hidden problems simply because many people are not aware of the way that others perceive them and they do not realise that their own perceptions of others may be founded on misjudgements. One of the primary aims of my research and teaching is to try to make this invisible world a little more visible so that we can at least have some idea as to which direction the blows might come from.

# 『英語学科入学からはや4半世紀』

漆原 朗子 (昭和59年卒)



SELDAA会員の皆様、懐かしい先生方、いかがお過ごしていらっしゃいますか。私は学部では主に吉田研作先生にご指導いただき、卒業後、言語学専攻の博士前期・後期課程に進みました。同級生がバブル期を謳歌していたその頃、四谷に留まり、事務局員として、微力ながら初代会長の鈴木達也さん、事務局長の鈴木博文さんをはじめ常任委員の皆様のお手伝いをさせていただきました。

その後、院の指導教授の太田朗先生のご退官もあって、88年からマサチューセッツ州のブランダイズ大学大学院にロータリー奨学金と大学のscholarship package(tuitionwaiver・TA/RAship)を得て留学しました。専門は、一部では言語学者より政治活動家として(in)famousな(立場によりますね)チョムスキーが提唱した生成文法です。90年、近隣のMITに留学中の大学院生と結婚、博士論文執筆中に妊娠というミステークを冒しながらも、93年何とか論文審査合格、2週間後無事男児も出産(逆子だったため、医療訴訟王国のアメリカですから帝王切開でしたが)し、その秋より福岡に在住しております。

なぜ、福岡かというと、夫も私も東京出身なのに、夫が「九州の日大」ともいわれる福岡大学(私立)に着任してしまったからです。転勤族の方々の中には、福岡は住みやすい、食べ物が美味しい、などの理由で福岡永住を選ぶ方も多いようです。確かに空港は近いし、スーパーでふぐも売っています。しかし、九州ご出身の皆様にはお耳障りかもしれませんが、やはり基本的には九州男児の生産地です(この間も、降りる人のために少し横にずれた後、先に並んでいた私がエレベーターに乗り込もうとしたら、70歳ぐらいの「おっさん」に「なんじゃ。女のくせに。」と言われました——マンハッタンなどでは危険があるから男性が先に乗るといいう話も聞いたことがあります、おっさんがそれを知っていたとは思えず、44年近い人生で面と向かってそんなことを言われたのは生れて初めてでした)

夫が福大に決まった時、私は大袈裟でなく涙にくれました。というのも、まだまだ女性教員が少ない大学、特にこちらは東大より九大が偉いという学閥状況(そもそも地方は国公立の方が偉いことになっている)ので、0歳児を抱えた東京の伴天連大学卒のおなごなど、もう絶対就職できないと思ったからです。天の助けか、北九州大学という大学(当時;現北九州市立大学)から専門の公募があり、応募したところ採用されました(ちなみに、当時文学部の語学系教員14名のうち、九大でないのは2名(私ともう一人の女性)、私立は私だけでした)

ところが、着任してからまた驚きの連続です。幼稚園からアメリカの大学院に至るまで私立にどっぷりつかってきた私にとって、市や大学の制度そのものが硬直化していると思えました。人的側面でも、国立大卒の先生方もずいぶん違いましたが、事務を司る市職員の方々の中には、私が今まで誇張であろうと思っていた、絵に描いたような官僚主義的な方、小役人的な方がいらっしゃいます。それでも、10年間何とかうまくおつきあいしてきてはいるつもりです。

97年度、夫は福大の、私は文部省(当時)の在外研究員制度で4歳児を連れて再びボストンで研究と子育てに集中することができましたが、帰国後はお礼奉公とばかりに、大学の雑務がどんどん回ってきました。挙句の果てには、行財政改革の一環としての国公立大学独法化で、財政事情の悪い九州市は、国立大学法人化(2004年)に続けとばかり、首都大学東京のような注目度がないのをいいことに、この4月本学を独法化して

---

---

しました。その渦中の2003-04年度、教員組合執行委員も回ってきて、昨年度は書記長として赤はちまき（片山さつき氏ではありません）で当局と折衝、交渉をしたり、手続きの一環として事業場労働者代表になったりもしました。就業規則交渉、二四協定、三六協定など、労働法規にも少し詳しくなり、「クビになったらロースクールにでも入り直して人権派国際弁護士になってやる」などと半ばジョーク、半ば本気で言っていたところ、独法化後の新基準による審査により、10月1日付で教授に昇格となりました。

でも、そのせいか、一般教育科目（いわゆるパンキョー、語学、それに今は情報）の抜本的改革のために駆り出されています。2学期は近距離国内研修の機会を得、研究（と小6のお受験ママ）に徹しようと思っていたので、労働者代表として抗議しようかとも思いました（笑）。しかし、超小子化で人工減が予測を2年も早まりそうな日本において、「ゆとり教育」のつげがどんどん大学、それも特に地方の中レベル大学に回ってきています。研究者として自分の研究を続けているのはもちろんですが、（科研費なども結構いただいています）形骸化した教養教育を見直し、学生さんの知的好奇心を覚醒したいという思いはあります。私が登用（利用？）されるのも、たぶん私が折に触れて、上智で受けた教育のあり方、専門教育はもとより、新人生オリエンテーション、人間学、STPなどに言及していることから、旧帝大系にはない方向性と方法を提案するのではと思われるからかもしれません。

全入時代を迎える「冬の時代」の大学にあって、「冬来たりなば春とおからじ」の心持ちで、基礎学力低下、メンタルな問題、フリーター、NEETなど、学生さんに関する現状に向かい合っていきたいと考えております。様々なお立場からのご助言、ご示唆、叱咤激励などございましたら、ぜひsaeko@kitakyu-u.ac.jpにお寄せ下さい。ご一読ありがとうございました。

## 『このごろ思うこと』

本田 まり子（旧姓 宮崎）（昭和49年卒）

現在、「動法」と呼ばれる身体技法の稽古をしております。どんなものが言葉で説明するのは難しいのですが日本古来の伝統的な身体の動かし方の稽古といったところでしょうか。例えば最近注目されている「なんば歩き」（右手右足、左手左足を同時に出す歩き方）も日本の伝統的な身体の使い方といえます。始めて三年ほどになりますが、日本の伝統文化がいかに素晴らしいものかを再認識しております。能などの伝統芸能のみでなく、日常の生活における立ち居振る舞いそのものがとても豊かで優れてたのではと思います。お稽古をしておりますと、とても静寂な心地を得ることができ、すべての存在はつながっているということが実感として感じられることがあります。そんなおり、アメリカ軍によるイラクでの劣化ウラン弾の使用に関する報道番組（テレビ朝日；5月12日）を見ました。湾岸戦争、アフガニスタンに対する攻撃、そしてイラク戦争に使用された劣化ウラン弾による深刻な放射能汚染の実態を知りとても悲しい気持ちになりました。放射能汚染の恐ろしいところは、その影響が長期にわたって続くこと、また遺伝子損傷により、被爆した本人のみでなく子孫にまで深刻なダメージを与える点です。その影響はアメリカ軍兵士（戦争終結後に派遣された兵士も含めて）にも及んでいるとの事です。兵士を守るための放射能汚染防御措置が研究されビデオまで作成されたにもかかわらず、結局使われなかったとの事です。そのビデオ作成者の元軍人の証言によると、使用しなかった理由は、防御対策を講ずれば危険な兵器を使用したことがわかり、そのことでアメリカが非難されるのを恐れたからだということです。そのために、同胞である自国軍兵士をも犠牲にするとはなんとも悲しいことです。別の番組で、イラクに従軍したあるアメリカ軍兵士が、イラク人を殺すたびに自分の魂が死んでいくのを感じるというようなことを言っているのを思い出しました。彼がそう感じたのは、すべての存在がつながっているからなのではないでしょうか。このことをできるだけ多くの人が実感し、戦争のない平和な世の中になって欲しいと切に念じております。

## 谷口由美子さんの「サウンド・オブ・ミュージック」の講演会を聞いて

SELDAAの会員であるにもかかわらず、このような講演会に出席したのは、初めてでしたが、ニッセル神父様も出席なさり、講演会というより参加者全員が楽しめる小さなパーティーのようでした。映画や舞台のトラップ・ファミリーのドラマチックなお話はそのナンバーと共に有名で、谷口さんの落ち着いた、ソフトな語り口は児童文学書の翻訳者であることと相俟って一層、この夜の楽しい雰囲気盛り上げていた気がします。映画の中では、ナチの手を逃れてスイスに脱出したことになっていたトラップ・ファミリーは、実際にはその後、アメリカに渡り、トラップ・ファミリー合唱団としてアメリカ中を巡演した事、バーモント州のストウにトラップ・ファミリー・ロッジを建設、(一度焼失したが再建)現在もファミリーにより経営されている事、映画では、子供達は家庭教師のマリアに音楽を習った事になっているが実際には、子供達各々が非常に音楽性の高いファミリーだった事などとても興味深いお話でした。

翻訳書の内、谷口さんが翻訳だけでなく写真の構成なども担当している、写真集「サウンド・オブ・ミュージックの世界 トラップ一家の歩んだ道」の原作者、ウィリアム・T・アンダーソン氏は、谷口さんの友人でもあり、彼に会った時、ふと彼が「娘のマリア・フォン・トラップに会ったよ」と言った事が「サウンド・オブ・ミュージック」の本を次々と翻訳するきっかけになったとの事でした。

「サウンド・オブ・ミュージック」と「サウンド・オブ・ミュージック アメリカ篇」の原作は、トラップ艦長の最初の妻、アガーテの娘、マリア・フォン・トラップが書いたもので、マリアは現在、90才で健在。又、「わたしのサウンド・オブ・ミュージックアガーテ・フォン・トラップの回想」の原作は、やはり、最初の妻、アガーテの娘、アガーテが書いたもので、アガーテも91才で健在だということです。

お話の最後に、谷口さんが大事に保存なさっている本物のトラップ・ファミリーの演奏を録画したビデオを見せて頂き、合唱団としてアメリカ中を演奏旅行したトラップ・ファミリーの音楽性の豊かさには本当に感銘を受けました。

講演会後の懇談会では、参加者のご友人が「サウンド・オブ・ミュージック」のテーマ曲等をピアノ伴奏で唄って下さり、緑豊かな環境にある「ソフィアンズ・クラブ」は、ますます楽しく心地良い初夏の夕べを過ごす会場となりました。こんな講演会だったら又是非参加したいものと思います。

原岡 浩子(昭和40年卒)



### SELDAA セミナーについて

昨年度は大使講演会を3回開催しましたが、今年度は6月に開催した、昭和47年卒の谷口由美子氏による講演会のみになりそうです。以前は毎月開催されていたことを考えるともっと頻繁に開催すべきではないかというご意見もあります。ただ、毎月開催されていた従来のセミナーが中止に追い込まれたのは参加者不足がその最大の原因であったことを考えると、単に回数を増やすことで解決することではありません。そのなかで、谷口氏の講演会は、同窓会で企画したというより、会員の皆様の呼びかけにより同窓会がお手伝いをしたというユニークな企画でした。参加者も多く、大成功でした。12月一杯でソフィアンズクラブがなくなり、その後どうなるか不透明ですが、SELDAAとしては今後も年に何回かはセミナーを開催、または、後援したいと思います。ご意見、ご希望をお待ちしております。

### SELDAA ホームページについて

昨年5月にリニューアルされたホームページ(<http://seldaa.net/>)へのアクセス数が2万件を超えました。まだご覧になっていない方は、是非覗いてみて下さい。毎日更新される丹野先生の「学科長メモ」は読者数も多く人気のコラムです。会報誌の第一号から全ての会報誌の全ページを閲覧することもできます。会員間の交流に、そして、情報収集のツールとしてご利用ください。

2005年度SELDA A定例総会が、今年もオールソフィアンズ・デーに合わせて5月29日(日)正午より上智大学3号館223教室において開催された。

### 【活動報告】

石川会長から2004年度の活動報告・決算報告がなされた。

**SELDA Aセミナー**：長期、何代にもわたり熱心に活動をしてくださったボランティアの努力にもかかわらず、参加者の減少を主な理由に2004年度で終了。

**大使講演会**：試験的に3回行った。アイスランド、ヘルツェゴビナ、バングラディッシュ各国駐日大使に来ていただき、各国の事情/日本との関係などについて語っていただいた。英語学科在校生、卒業生だけでなく、他の学科の学生の参加もあり、活発な質問などもみられた。同窓会としては大使講演会の継続を願ったが、学校との連携という協力体制の難しさ、担当者の負担などの問題で継続不可能と判断、中止に至っている。

**ホームページ充実**：担当会員の努力により、毎日更新されている。とりわけ、まめに書き込んでくださる丹野学科長の学科長メモは好評。

**SELDA A20周年パーティー**：2004年12月4日開催40名ほどの会員の他、ニッセル先生、バリー先生、グラチアノ先生、ミルワード先生が顔を出され、歓談。

**会報**：年2回発行。会員現在7000人ほどだが、実際の発送は5000人余人。

**会員台帳**：実質的に手書き状態だった会員台帳の管理を目的に専用パソコンを購入し、データ化作業を始めた。

### 【2005年度の活動予定および予算】

**名簿**：発行事業は同窓会の大きな事業だが、2005年4月1日個人情報保護法施行の下、従来どおり発行できるか疑問になった。出来ない場合、会則変更が必要になる。今年度中に常任委員会で検討予定。

**SELDA A講演会**：6月9日卒業生の谷口由美子さんの講演会をSELDA A主催で行う。

**ホームページ**：引き続き2002年度卒の坂巻さんを中心に制作する。

**データ処理化作業**：常任委員の仕事マニュアル化、データ処理の効率化、簡略化を進め、ボランティアの役員の負担を少なくする仕組みを作る。

## 卒業生短信

9月下旬までに事務局に届いたお便りを掲載いたします。(本文中では敬称を略しております。ご了承ください。)  
皆様からのお便りを募集しております。ご自身の近況、自著の宣伝等、なんでも結構です。同封の葉書に書いて、同窓会事務局までお送りください。

昭和40年卒のクラスメートの皆様へ

永く米国に在住し、商社でキャリアを重ね、週末には日本人学校で教えるというエネルギーで人一倍闊達な人生を歩んでいらした美咲(杉山)トンプソンさん(昭和40年卒)が、本年1月22日(現地時間) ヒューストン(米国テキサス州)で散歩中の事故で亡くなったと日本のご家族より知らせを受けました。ご主人の死を乗り越え、数年前の大病を見事克服し、又元のお元氣な美咲さんに戻られたところでした。皆様にお知らせするのがこのように遅くなってしまった事をお詫びすると共に、ここに謹んで美咲さんのご冥福をお祈り致します。

山本(吉沢)裕子さん(昭和40年卒)が、本年4月8日に腹膜のガンのためにご自宅で亡くなったとご家族より知らせを受けました。子育てと介護の生活から解放されて「同期会」などに出席したいと願っていた矢先の事でした。とても残念です。山本さんのご冥福を心からお祈り致します。

原岡 浩子(昭和40年卒)

最近すっかりキーボードに慣れてしまい、肉筆で書くとき「漢字忘れモード」に入り込んでしまっ  
て困ってます。また、日頃英語を話す機会がなく  
会話だとNHKの「英語をしゃべらナイト」よりも  
いけてないと思います。聴く、読むならなんとかな  
るんですけど、話す事が難しいです。気のきいた単  
語が即出てこなくて、しどろもどろになってしまい  
ます。また、海外旅行もアジアだけなので、とって  
も難解な「シングリッシュ」にパニックアゲイン!  
といったところです。

江幡 雄一(平成4年卒) yuichi@kb3.so.net.ne.jp

「あなたが必要！」

SELDAAより募集とお知らせこんな項目が会報の  
片隅に載っているのに気が付かれた方、いらっしや  
いますか?(本当はフロントページに大きく載せた  
いのですが。)

そうです、常任委員として会の活動に参加してくだ  
さる方を首を長あ〜くして待っているのです。年度  
は違ってもこの上智キャンパスで学んだと言うだけ  
で、委員会メンバーは世代・損益を超えた面白いグ  
ループになっています。それぞれのメンバーができ  
ることを分担しながら活動しています。現在は昼間  
に仕事がある方ばかりの委員ですので、どうしても  
会合は夕方6時半過ぎからの2時間ほどになってし  
まいますが、会うのは年に数回、あとは分担作業で  
こなしています。余り家を空けられない方でも、参  
加できると思います。(たまにはお顔をみたいです  
けれど。)と、言うわけで、もう一度考えてくださ  
い。「やってもいいかな?」と。皆様からの連絡を  
待っています。info@seldaa.net 又は郵送で同窓会  
事務局まで、是非!!

「時間がない」と言う方、では是非、「短信」「卒業  
生便り」に寄稿を。居住の距離の如何にかかわらず、  
活動に参加できます。当たり前のこと、当たり前の  
毎日の生活、とお思いになっ  
ていても、同窓の方々  
には心なませしてくれる元氣薬になるのです。お待  
ちしていま〜す。

池沢 なるみ(昭和48年卒)

# 丹野先生の学科長日記

2005年7月15日(金)「期末試験」

今日は3時15分から6時35分まで、2科目期末テストを行いました。「米文学史」3、4年生のお誘いで飲み会を開催。久方ぶりに十数名の学生と楽しく飲食歓談することが出来ました。この時ばかりは、学生の答案を採点し、成績評価をしなければならぬ教員の過酷な義務の重圧を、身に染みて感じました。

2005年7月27日(水)「ニアミス」

今朝、2号館9階930共同室から富士の霊峰が見えました。オープンキャンパス第一日目。予想いや懸念した通り、「英語学科と国際教養学部との違いはどこにあるのですか？」という質問が出ました。必死に答えようとするうち、理念と道義なき我が学科と、明確なプリンシプルを持って学部改組・発展しようとしている元比較文化学部が、高速でお互い接近しつつある現実をあらためて見せつけられたのです。このまま英語学科は正面衝突して粉砕されてしまうのでしょうか。

2005年7月27日(水)「オープンキャンパス」

今日明日連続10時から4時50分まで図書館地階の学科ブースにて、英語学科は大学受験を目指す高校生に、学科の宣伝・勧誘・営業活動を行います。従来一番多い質問は、「英文学科と英語学科との違いは何ですか？」「文と語の違いです」一見ふざけたこの答えに学科の抱える永年の矛盾と難題が隠蔽されています。「国際関係を勉強したい」「アジア文化研究に興味がある」「言語学を極めたい」と言う学生に、「英語学科は、単なる語学ではなく専門を勉強するチャンスに恵まれた学科です」と答えると、実は他人様の宣伝をしている自分に気がつきます。「海外留学が夢です」「毎年欧州、北米、豪州に50人位留学出来るので、是非英語学科を受験してください」待てよ、学科は海外留学の単なる基地か？「英会話学校行くより、英語学科で勉強した方が英語しゃべれるようになりますか？」この手の質問には、詐欺師にならねば答えられません。さて、今年はいよいよ極めつけの質問が出るでしょう。「英語学科と国際教養学部の違いは何ですか？」学科教員の皆さん、この手の爆弾質問を浴びせられた時の危機管理体制を、話し合っておくべきでしたね。

2005年7月31日(日)「今週の予定」

早いもので7月も終わり。明日からは葉月です。とは言っても、「人生をコーヒースプーンで計ってしまった」器量の小さい私奴には、長い緊張の三ヶ月でした。8月1日～4日：残務整理。9月に向けて人事、カリキュラム、海外就学者(帰国子女)入試の準備。海外留学帰国者単位換算業務等。5日(金)から22日までは夏期一斉休暇に入り、英語学科事務室も期間中休業します。しばらくの間、「ズボンの裾を捲り上げて」海辺や谷戸で休息の予定。不運な。アルフレッド・ブルーロックとは違い、人魚達の歌声に誘われて大海原の優しい懷に抱かれてみたいものです。

2005年9月16日(金)「今日は入社試験？」

今日は海外就学経験者入学試験です。朝8時半頃、SJハウス向かいのメンストに、リクルートルックの若者たちがたむろしていました。就職説明会が社員研修会があるのでしょうか？入試試験会場3-521へ行ってびっくり仰天。何と受験生全員濃紺か黒のスーツに白のシャツ。男子はネクタイ姿ではありませんか。メンストにいた若者たちは受験生だったのです。数年前まで、とりわけ9月受験生の服装はバンクルックからスーツ姿まで実に多彩でした。これも「改革」という大潮流の一現象なのでしょう？

2005年9月1日(木)「再起復帰」

今日を以って学科業務を正式に開始しました。相変わらず三枚目大根役者。しかもズボンの裾を捲り上げての舞台再登場ですが、未だ教員や学生の姿はありません。"There will be time to prepare a face to meet the faces that you meet....(T.S. Eliot) めでたいことに、タンノズ・バーは閉店の運びとなりました。それに桃を食べようなどという妄想を抱くことも止めましょう。旬はとうの昔に終わったのですから。とにかく狂態を演じて宇宙の秩序を乱すことは御法度です。さて皆様、いささか喜ばしいお報せがあります。去る7月24日上智大学で行われたTOEIC I Pテストの学部・学科別平均スコアで、外英が比文を抜いて最高点でした。英語学科：TOTAL 865.4 (LISTENING 455.0 READING 410.4) 因みに比較文化は、TOTAL 856.3 (446.3 410.0) でした。

## <事務局便り> コンピュータ化の進捗状況について

SELDAА事務局では、同窓会の設立当時から台帳(紙)を用いて実施してきた情報管理の仕組みを電子化(コンピュータ)し、事務局運営を効率化することをこの一年ほど進めてきました。具体的には「紙」に書かれた情報を「コンピュータ」に入力し、確認し、更新する作業ですが、その作業と運営には「個人情報保護法」の精神の通り細心の注意を払っています。たとえば、7000人を超える会員データの管理を厳密に行うため、電子化されたデータの漏洩を防ぐための仕組みを作り、また仮に漏洩したとしても暗号化されて保護されているデータを読み取れるのは、特定の鍵を持ったSELDAА関係者だけに限定する管理体制で運営しています。

さて、電子化の成功に伴い、今回から会報誌の封筒に貼ってある「ラベル」でさまざまな情報をお伝えすることができるようになりました。具体的には、会費の納入状況を明確に記載することができるようになりました。納入状況は、プライバシーを記載し、以前印字していた「未」を廃止し、これを「願(会費のお支払いをお願いします)」書き換えました。また、一時途切れていましたが、従来「S」と印字されていた終身会員の記号を、よりわかりやすくするため「終身会員」と書き換えました。右記、主な記号の説明です。

記号	説明
願	ラベルの右上にこの印がある方は、今年度分の会費が未納です。会費のお支払いをお願いいたします。
20XX/03/31	これは会費の有効期限を指しています(YYYY/MM/DD)。会費は3月31日までの年度単位で管理しています。たとえば「2006/3/31」と書いてあれば、これは「2005年度有効」を意味し、2006年度分(2006年4月1日)からは会費が切れてしまいますので、時期になりましたらお支払いください。
名誉会員	ラベルの右上にこの記載がある方は、会費を支払う必要はありません。英語学科教職員の方々は名誉会員です。
終身会員	ラベルの右上にこの記載がある方は、会費を支払う必要はありません。終身会員費(20,000円)を支払ってくださった方々です。

SELDAА事務局では、会員データの電子化で事務効率の改善のみならず、データの有効利用についても今後さらに検討いたします。何かご不明な点などございましたらSELDAА事務局までお知らせください。ホームページ(<http://seldaa.net/>)もよろしく願いいたします。

## 重要

### 会員の皆様へ

#### 意思確認のお願い

会員の皆様にはご清祥にお越しのこととお慶び申し上げます。

日頃上智大学英語学科同窓会「SELDAА」のためにご協力くださり感謝いたします。

さて、2005年4月から「個人情報保護法」が施行されており、あらかじめ本人の同意を得ないで、個人情報を利用してはならないことになりました。

SELDAАでは、同窓会からの通知（SELDAА会報誌、セミナー案内、その他の通知など）やソフィア会との会員住所データの授受等に限り個人情報を使用してまいりました。その内容は、氏名、旧姓、性別、卒年、会員番号、郵便番号、住所、電話番号、連絡先（主に実家の住所）、卒業後の勤務先に関する情報などです。同窓会からの一括した発送物は、情報の紛失、漏洩対策を万全にするためにSELDAАと契約関係にある業者に委託しています。なお、3年ごとに発行してきました会員名簿については、状況として発行が難しくなっているために今後は制作を中止する方向で検討いたします。

皆様の個人情報に関しましては、SELDAАではこれまでも厳重に管理してまいりましたが、今回の法律を受け、より一層その情報管理を慎重に行う所存でございます。

つきましては、個人情報の取り扱いにつきまして下記の要領にて会員の方々のご意思を確認させていただきたいと思っております。なお、ご回答がない方については、SELDAАの情報管理方針をご了解いただいたものとします。同意されない方は何卒ご連絡いただけますようよろしくお願いいたします。

#### 記

・上記のガイドラインに基づく個人情報の開示に同意されない方は、同封の「意思確認連絡書」に必要事項をご記入の上、2006年3月末日までに、FAX(03-3238-3910)、郵送、または、SELDAАホームページ（<http://seldaa.net/>）を通じて同窓会事務局までお申し出ください。

〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町7-1  
上智大学英語学科事務室気付 英語学科同窓会事務局

ご回答いただいた内容及び現在SELDAАで管理している個人情報は、外部の企業・第三者等には一切提供または開示することはありません。

以上

2005年11月  
上智大学英語学科同窓会 SELDAА  
事務局

2004年度 上智大学英語学科同窓会 収支決算書

自 2004年4月1日 至 2005年3月31日

収入額 20,535,237円  
 支出額 3,175,604円  
 次年度繰越金 17,359,633円

(単位：円)

	科 目	予 算	決 算	備 考
収入	1.繰越金	17,858,746	17,858,746	
	2.会費	2,000,000	2,219,000	
	3.受取利息	400	148	銀行預金・郵便貯金の利息
	4.活性化事業収入	0	68,000	20周年記念パーティー会費
	5.セルダ・セミナーより	0	389,343	
	合 計	19,859,146	20,535,237	
支出	1.名簿作成積立金	600,000	0	
	2.会報費	3,000,000	2,258,519	印刷料、発送費用
	3.SELDAAセミナー	400,000	105,000	大使講座謝礼(35000円×3)
	4.交流促進費	300,000	224,675	ウェブサイト維持管理費
	5.総会費	100,000	60,330	懇親会費
	6.会議費	150,000	143,254	常任委員会など(活性化委員会20091円)
	7.事務処理費	500,000	249,125	PC購入代金196,323円
	8.20周年記念準備費	100,000	134,701	20周年記念パーティー
	9.予備費	14,709,146	0	
	合 計	19,859,146	3,175,604	
			17,359,633	2005年度に繰越

2004年度繰越金内訳

郵便貯金振替口座	6,219,270
郵便貯金ば・る・る口座	904,604
東京三菱銀行普通口座	10,215,154
現金	20,605
合計	17,359,633

上記の通り、相違ないことを認める。

会計監査 井坂 由美子(1972年卒)  
 岩村 玲子(1974年卒)

2005年度 上智大学英語学科同窓会 予算(案)

自 2005年4月1日 至 2006年3月31日

(単位：円)

	科 目	予 算	備 考
収入	1.繰越金	17,359,633	
	2.会費	2,000,000	入会金を含む
	3.受取利息	150	銀行預金・郵便貯金の利息
	合 計	19,359,783	
支出	1.名簿作成積立金	600,000	
	2.会報費	3,000,000	会報40・41号
	3.SELDAAセミナー	200,000	谷口氏講演会他
	4.交流促進費	300,000	ウェブサイト維持管理費、会員間交流事業費等
	5.総会費	100,000	資料作成・懇親会費等
	6.会議費	150,000	常任委員会等
	7.事務処理費	350,000	データ作成・維持管理に伴う外注費、ソフト購入、通信費、消耗品費等
	8.予備費	14,659,783	
	合 計	19,359,783	

## 住所変更の通知にご協力ください

ご住所、勤務先などに変更があった方、名簿の誤りを訂正される方、お名前の正しい読み方を知らせてくださる方は、英語学科同窓会事務局またはソフィア会事務局までお知らせください。事務局でいただいた変更通知は、「個人情報保護法」を尊重し必要な手続きの上、ソフィア会事務局にも通知します。

住所不明の方が多数いらっしゃいます。消息をご存知の方、情報をお寄せください。お友達で会報が届いていないという方がいらっしゃいましたら、是非事務局までご一報ください。

また、最近では市町村合併などによる住所の変更が多くなっており、是非最新の住所、電話番号等をお知らせください。

住所・勤務先の変更等は、同封の葉書をお使いいただくか、SELDAAのホームページの「住所・勤務先変更フォーム」([http://seldaa.net/about/change\\_form.html](http://seldaa.net/about/change_form.html))から送ってください。

## SELDAA より、募集とお知らせ

SELDAAでは、皆様よりこの会報に載せる記事を募集しています。近況や最近感じたことなど、何でも結構です。書式は自由ですので、同窓会事務局宛にどしどしお送りください(写真も大歓迎)

この同窓会の常任委員として手伝ってくださる方を募集しております。ボランティアで私達と一緒に会を盛り上げてくださる方、ご連絡をお待ちしています。

上記に関するご応募・お問い合わせはこちらまで。

連絡先: 〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町7-1 上智大学英語学科事務室気付 上智大学英語学科同窓会事務局  
FAX.03-3238-3910 E-mail:info@seldaa.net  
(Faxは、英語学科同窓会宛を明記してください。)

## 会費納入のお知らせ

本会の諸活動は、卒業生の皆様からの会費の納入によって賄われています。同窓会活動のより一層の充実と活性化を図るために、ぜひ会費をお支払い下さいますようお願い申し上げます。

会費の支払方法には、毎年会費を支払う「一般会員」と、一括払いの「終身会員」の2通りがあります。初めて会費をお支払いになる際には入会金も合わせてお支払い願います。金額は下記の通りです。同封の振替用紙にて最寄りの郵便局または銀行よりお支払いください。その際、ソフィア会会員番号を必ずご記入ください。(なお、振込用紙は、発送の都合上すべての方に送っておりますので、ご了承ください。)

<b>入会金</b> : 1,000円
<b>一般会員</b> : 年会費 2,000円 (できれば3年分まとめて)
<b>終身会員</b> : 一括払い 20,000円

## あなたの会費納入状況

今回の会報の別ページで報告してありますように、昭和32年から平成17年までの英語学科卒業生7,335名の会員データをコンピュータ化しました。それに伴い、会員の納入状況をより明確にお伝えすることができるようになりました。封筒の宛名ラベル右上にある日にち、例えば、「2006年3月31日(2005年度分)まで会費が支払われていることを示します。会費は年度単位で管理されています。「終身会員」「名誉会員」は表示の通りです。会費未納の方は、ラベルの右上に「願」と書かれています。

SELDAA 常任委員 (2005年3月現在)

名誉会長 / 丹野 眞 (英語学科長)  
会 長 / 石川 雅 弥 (昭和40年卒)  
副会長・事務局長 / 池 沢 成 実 (昭和48年卒)  
副 会 長 / 大日方聖信 (昭和62年卒)  
会 計 / 東郷公徳 (昭和62年卒)  
会 報 / 佐藤誠一郎 (昭和53年卒)  
常任委員 / 飛弾 誠 (昭和53年卒)  
                  根本竜太郎 (平成15年卒)  
                  林めぐみ (平成13年卒)  
監 査 / 井坂由美子 (昭和47年卒)  
                  岩 村 玲 子 (昭和49年卒)